

## 《研究ノート》

## 高関与型向社会行動の変容に関する文献的考察

瓜生原 葉子

- I はじめに
- II 臓器提供の意思決定
- III 臓器提供の意思表示行動
- IV 行動変容ステージモデル
- V 行動に影響を及ぼす因子 (1)：価値観と知識
- VI 行動に影響を及ぼす因子 (2)：作用メカニズム
- VII 行動に影響を及ぼす因子 (3)：外部からの介入方法
- VIII 外的環境因子
- IX まとめ

## I はじめに

ビジネスマーケティングにおいて、購買の意思決定プロセスに「関与 (involvement)」の概念は重要である。自分のイメージ形成との関連性、自分の価値観や信念にとっての重要性、結果に対する不安や誤った決定への危険性 (知覚されたりスク) がその構成要素である。つまり、購買され使用される商品・サービスが自分のイメージをつくるなど、消費者にとって高度に個人的な重要性をもっている場合、また、誤った決定により高い社会的リスク、心理的リスクを負う場合は高関与型の購買と呼ばれる。

同様に、ソーシャルマーケティングの視座では、「社会に望ましいとされる行動」が、個人の価値観や信念に大きく関与していたり、行動した結果が社会的・心理的リスクを負う可能性がある場合、高関与型の行動と考えられる。

より良い社会を創るため、「社会に望ましいとされる行動」への変容を促進させることが必要であるが、その実現度は、その関与度などに依存すると報告されている (Kotler & Andreasen, 2003)。社会行動変容プログラムは表 1 のごとく分類されているが、3 つの主要要素 (関与度が高いか低いか、行動が 1 回限りか継続的か、個人的か集団的か) で 8 つのカテゴリーに分類され、関与度が高く、継続的な行動は、行動変容の難易度が高く、そのうち、グループによる決定の場合は最も難しいと言われている。

1 個人や社会全体の利益のために行動を変革させることを目標として実施されるプログラムである。態度の変化で終らすではなく、「行動変容 (behavior change)」にこだわることで、多様な分野の理論や知見を用いるなど学際的なアプローチを行うことが鍵である (瓜生原, 2018)。

表1 社会行動変容プログラムの分類

		低関与度	高関与度
一回限りの行動	個人	・慈善事業への寄付 ・投票への登録 ・医療扶助制度への登録	・献血
	グループ	・州の憲法改正への投票	・クラブの制限的な会員規約への反対投票
継続的な行動	個人	・エレベータ内での禁煙	・禁煙、薬物の中止 ・家族計画の実施 ・ <u>臓器提供の意思決定、意思表示</u> ・骨髄ドナー登録
	グループ	・時速 55 マイルで走行 ・道路の右側通行	・全志願制の軍隊構想への支援

出所：Kotler & Andreasen (2003) を筆者が改変

本研究では、変容の難易度が高い（関与が高い、継続的）行動のうち、個人の「臓器提供への意思決定、意思表示」行動に焦点をあてる。「臓器提供への意思決定と意思表示に関する行動変容」は、向社会行動（prosocial behavior）の一つとして捉えることができる。向社会行動とは、自己の利益より他者の利益を優先する利他主義に基づいて行われる意図的かつ自発的な行動であり、利他行動より広い概念と定義されている（小田，2013）。ただし、本研究では、決して臓器を提供する行動を向社会行動としているのではない。「提供するかどうか意思決定し、その意思を媒体に表明しておく行動」を向社会行動であるとする立場である。

「臓器提供への意思決定と意思表示に関する行動変容」は、人間の行動を科学的に探究する様々な学問分野において研究されている、学際性が非常に豊かなテーマである。人間の行動変容を目指す営みであることから、ソーシャル・マーケティング、行動経済学、心理学（行動心理学・社会心理学）、コミュニケーション学などで実証研究や理論化が進められているだけでなく、そのテーマから、公衆衛生学や移植医療においても研究が進められている。

本稿では、臓器提供への意思決定、ならびに意思表示行動について概観し、消費者行動、健康増進行動、などの人間行動を説明する理論、その行動変容に寄与する因子について、学際的な観点から網羅的に先行研究の整理を行い、考察する。

## II 臓器提供の意思決定

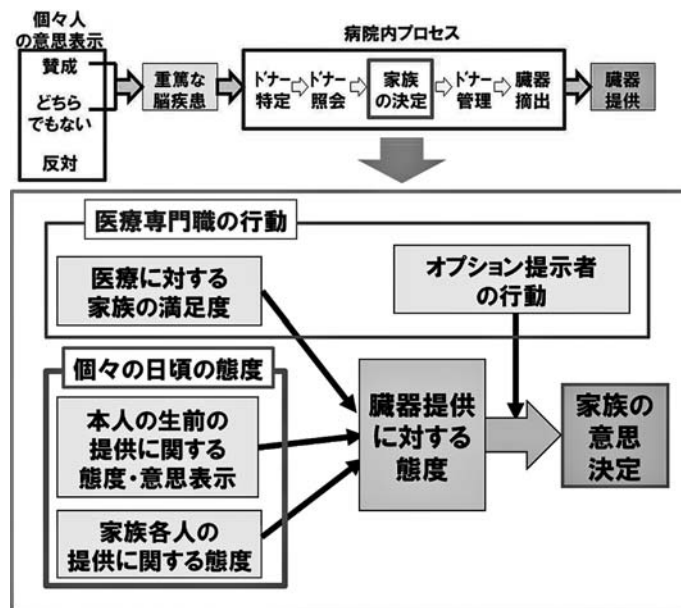
Kotler & Andreasen (2003) が分類するように、死後、臓器を提供するか否かは、個人の価値観や信念に大きく関与し、その意思決定結果は、社会へのインパクトが大きいため、「高関与型」の行動と考えられる。では、どのような場面で意思決定が必要とな

るのであろうか。

臓器提供に対する意思決定には、2つの側面がある（図1）。一つは、大切な家族が脳死とされうる状態と判断され、限られた時間で臓器提供をするかどうかを家族が意思決定する場面である。もう一つは、日頃から自身の臓器提供について考え、提供の可否を意思決定し、意思表示を保険証、免許証、マイナンバーカードなどの媒体に行い、それを家族と共有することである。

前者に関して、表2の先行研究調査から、意思決定は2段階のプロセスに分かれると考えられる。まず、ドナー家族が提供すべきかどうかを限られた時間で考える過程である。これに対しては、ドナー本人の生前の意思、家族メンバーの臓器提供に対する態度、施された医療に対する満足度が影響する。次の最終決断の過程においては、医療専門職の行動が大きく関与する（瓜生原，2012）。「最も困難な時に、最も不幸な家族に対して行われる最も難しい説明」とされる難しい局面であり、臓器提供についてのオプション提示をするタイミング、説明内容、説明態度など、医療専門職要因が高いため、本研究では議論をしない。一方、後者に関しては、国民全員が日常関わる自己の意思決定である。

図1 臓器提供に対する意思決定



出所：筆者作成

表2 ドナー家族の意思決定に影響を及ぼす因子

家族の臓器提供に対する態度		本人の態度	医療満足度	家族の意思決定		
知識	宗教的・文化的・利他的・規範的 考え	故人の生前の 態度	医療に対する 家族の満足度	オプション 提示者	オプション提示者の行動	
臓器提供についての知識 Moores, 1976 Corlett, 1985 Hessing, 1986 McIntyre, 1987 Basu, 1989 Nolan, 1989 Wakeford, 1989 Creecy, 1990 Horton, 1990 Gallup, 1993 Shulz, 2000	宗教的考え Moores, 1976 Basu, 1989  文化的考え Feldman, 1988 波平, 1990 Woo, 1992 Wheeler, 1994 Ohnuki, 1994 梅原, 1999  利他的考え Cleveland, 1970 Moores, 1976 Pessemier, 1977 Corlett, 1985 Parisi, 1986 Batten, 1987 McIntyre, 1987 Basu, 1989 Batten, 1990  規範的考え Cleveland, 1970 Corlett, 1985	臓器提供についての家族間の対話 Burroughs, 1998 Harris, 1991 Tymstra, 1992	故人のケアに対する満足度 Bart, 1981 Kozlowski, 1988 Cerney, 1993 De Jong, 1998 Siminoff, 2001 Rodrigue, 2006  死の伝え方 Meister, 1989 Peele, 1989 Youngner, 1989 Jasper, 1991 Pelletier, 1992 Tymstra, 1992	コーディネーターによるオプション提示 Klieger, 1994 Von Pohle, 1996 Dejong, 1998 Gortmaker, 1998 Shafer, 1998 Linyear, 1999 Helms, 2004 Rodrigue, 2006 Salim, 2007	オプション提示 Garrison, 1991 Niles, 1996 Von Pohle, 1996 Delong, 1998 Evanisko, 1998 Gortmarker, 1998 Siminoff, 2001 Rodrigue, 2006  オプション提示の環境 Dejong, 1998 Gortmaker, 1998	与えられる情報への満足度 Dejong, 1998 Rosel, 1999 Siminoff, 2001 Siminoff, 2002  オプション提示者の習熟度(教育含む) Rikker, 1995 Radecki, 1997 Evanisko, 1998 Rosel, 1999 Siminoff, 2001 Roels, 2008

出所：瓜生原（2012）を筆者が改変

### Ⅲ 臓器提供の意思表示行動

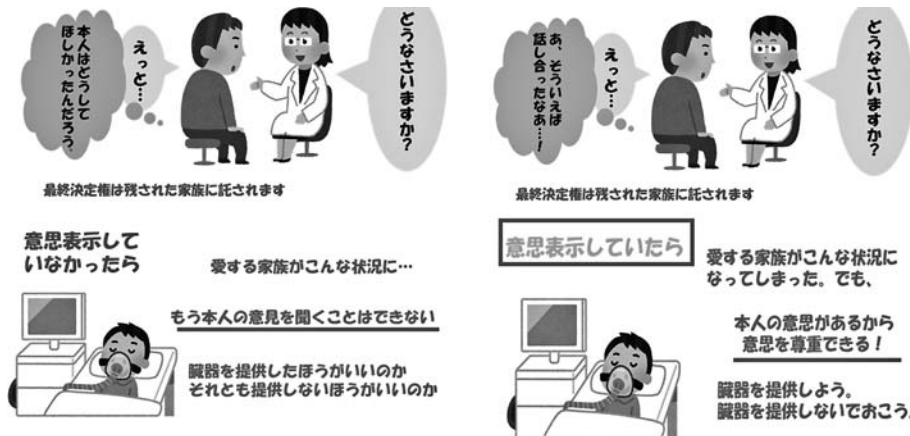
では、意思決定で留まらず、なぜ意思表示行動が重要なのであろうか。万が一事故などで回復の見込みが亡くなった場合、二つの視点で述べる。

第一に「本人の意思の尊重」のためである。日本では、本人の意思に基づき臓器の提供が判断される **explicit consent** 制度が採用されているため、生前に意思を表示することが必要である。意思表示がなされていない状況においては家族が付度をする。その際、本人の意思が伝わっていなかったら、その意思を確実に尊重できない可能性がある。特に、臓器を提供したくない人にとって、その意思が尊重されるためには不可欠なのである。

第二に、残された家族の心的負担を軽減することが可能だからである。限られた時間で家族が意思決定することは非常に困難である。その際に意思が明確に表示されていると、家族は迷うことが少ない。実際、厚生労働省の脳死臓器提供 200 例のまとめによると、本人の意思表示があった場合は、家族の自発的な申し出が 88.1% (96/109 例) で

あったのに対し、意思表示がない場合は52.7%（48/91例）と少なかった<sup>2</sup>。また、家族の承諾理由においても、前者の場合は100%が「意思表示の尊重」であったのに対して、後者の場合は、「社会貢献」「生前の発言の尊重」「生命の永続」「家族としての思い」など多岐にわたり、明確な意思が表示されていない場合に、家族は様々な想いを巡らせ心的負担を感じていることが推察される。一方、世論調査結果（内閣府，2017）においても、ご家族の誰かが脳死と判定され、その方が臓器提供の意思を書面に表示をしていた場合、その意思を尊重する人は国民の87%であった。以上より、本人の意思の尊重、および残された家族の心的負担の軽減という点において、意思表示行動を促進することは重要である。

図2 臓器提供意思表示の重要性



出所：筆者作成

この臓器提供意思表示行動に関して、日本では、運転免許証、保険証、マイナンバーカード、意思表示カード、インターネット登録など世界で最も多様な意思表示手段が整備されているにもかかわらず意思表示率は12.7%に留まっている（内閣府，2017）。

1997年の臓器移植法の施行以来20年間、大規模な啓発の努力がなされるなど、国家レベルでの取組みにもかかわらず、意思表示率が低率に留まっている現況を鑑みると、

- 2 200例の検証事例のうち、平成22年7月17日の改正臓器移植法施行前が87例（43.5%）、改正法施行後が113例（56.5%）。本人の書面による意思表示があった事例は109例（改正法施行前が87例全例、改正法施行後が22例）。本人の書面による意思が不明で家族の承諾により提供に至った事例が91例であった。91例における臓器提供の意思を把握するきっかけは、家族の自発的な申し出が48例（52.7%）、主治医等からの選択肢提示が43例（47.3%）であった。
- 3 具体的内容は、「社会貢献」：誰かの役に立ちたい、たくさんの人を助けたい、病で苦しんでいる方の役に立ってもらいたい、「発言の尊重」：本人が役に立ちたいと言っていたのを尊重したい、本人が意思表示カードを持ちたいと言っていたのを尊重したい、「生命の永続」：本人の一部がどこかで生きてほしい、誰かの中で生き続けて欲しい、家族としての思い：臓器提供を成し遂げたことが誇りに思える、本人を失う悲しみから救われる、本人の死を無駄にしたくない、家族が最期にできること、誰かの中で生き続けていると考えられるなら家族の支えとなる、最期に本人らしいことをしてあげたい、臓器提供は本人を失うという悲しみの中で大きな希望であった。

従来の知識伝達を主眼とする啓発活動では、行動に結び付くまでにギャップがあると言わざるを得ない。実際、諸外国においても、マスメディアなどによる情報の提供やキャンペーンだけでは行動変容にはつながらないとの報告が散見される (Thomson, 1993; Jacob, 1996; Wolf, 1997)。最近のメタアナリシスにおいても、個人間メッセージの重要性を示唆している (Peters *et al.*, 1996; Feeley, 2009; Cameron *et al.*, 2013)。すなわち、意思表示行動の変容に結び付く、より深化した手法の開発と標準化が日本の喫緊の課題であり、その根拠となる要因の探索が不可欠である。

#### IV 行動変容ステージモデル

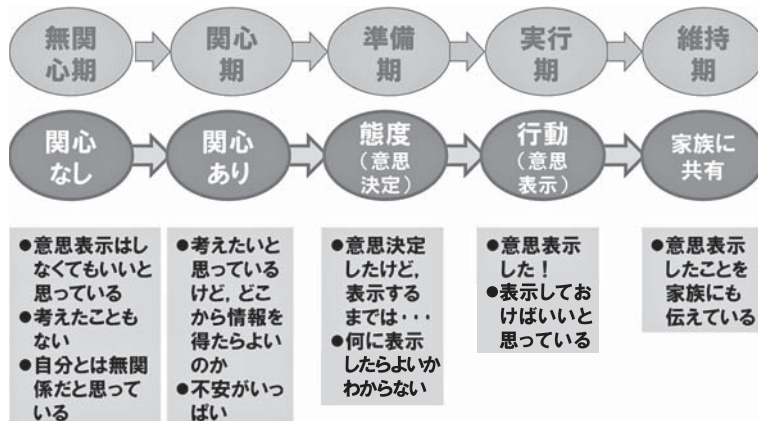
行動変容ステージモデル (Stages-of-Change Model) は、人間が行動を変容する際には、「無関心期 (行動を変えようと思っていない)」、「関心期 (行動を変えようと思っ  
ているが実際には行動していない)」、「準備期 (行動を変えよう自分なりに行っ  
ている)」、「実行期 (行動を変えて6ヶ月未満である)」、「維持期 (行動を変えて6ヶ月以上  
である)」の5つのステージを段階的に経るという考えを基盤にしたものである。1983  
年に禁煙に関する研究から導出されたものであり、各ステージにおいて適切な介入を行  
うことが、行動促進に重要であるとされている (Prochaska and Velicer, 1997)。

「無関心期」(precontemplation) は、行動を変化させる意思なく、問題をも否定してい  
る段階であるため、行動を変える必要性を感じさせる (感情的経験)、メリットを意識  
させる (意識の高揚) ことが重要である。「関心期」(contemplation) では、問題や変化  
の必要性に気づき、行動変化を考え始める段階であるため、「不安・障害」を全て挙げ  
て解決法を考える、できそうなことや身近なことに結びつける、ポジティブイメージ  
(自己の再評価) が有用である。「準備期」(preparation) では、意思決定をし、行動の  
ための準備を始める段階であるため、行動変容を行う際の誘因および報酬に着目する。  
また、行動開始を周囲に宣言 (自己の解放) することも効果的である。「実行期」(ac  
tion) は、行動を変えたが習慣になっていない段階であるため、小さな目標の設定と達  
成により自己効力感を高めること、周りからのサポートを活用 (援助関係) したり、継  
続しやすい環境作り (刺激統制) をすることで、「維持期」(maintenance) に移行できる。

本モデルを臓器提供の意思決定、および意思表示に適用したのが図3である。臓器提  
供の意思決定、および意思表示を考える上で、行動変容ステージは重要な視点をもたら  
す。まったく関心のない人と、既に関心を持っているけれども、意思決定にためらっ  
ている人では、価値観や知識レベルに違いがあることが予測され、また行動を促進する上  
で効果的な働きかけも異なると考えられる。また、既に自らの意思は定まっているが、  
これを表示できていない人に対して求められるアプローチも異なると考えられる。こう

した点を踏まえ、各段階において何が影響しているのか、次章以降紐解いていく。

図3 行動変容ステージモデルに基づく臓器提供の意思決定、意思表示の事例



出所：筆者作成

## V 行動に影響を及ぼす因子（1）：価値観と知識

本章以降、臓器提供の意思決定と意思表示に影響を及ぼす重要な因子に関する研究を中心に、向社会行動を論じた多様な分野における研究を、3つの視座で整理する。

第一に「価値観や知識」である。これまで数多くの研究が、人間の価値観や知識に注目してきた。本章では、文化や宗教、利他性、援助規範、役割アイデンティティ、さらに臓器移植や意思表示に関連する知識を検証した研究を概観する。第二に、価値観や知識の「作用メカニズム」である。人間が有する価値観や知識が、人間の内部においてどのように作用し、行動へとつながっていくのか、そのプロセスに着目した研究である。第三に、「外部からの介入方法」である。意思決定や意思表示行動に影響を及ぼす人間の価値観や知識を所与のものとして捉えるのではなく、外部からアプローチすることによって、行動変容を促すことができるのではないかと考え、これを実践し、その効果を検証する研究である。対象者に提示される情報の見せ方や伝達する媒体、金銭的なインセンティブ、家族との話し合いの効果などを取り上げた研究を検討する。

まず、「価値観や知識」について、文化・宗教、利他性、援助規範・規範アイデンティティ、知識の順に関連研究を概観する。

### V.1. 文化・宗教

「臓器を提供する」という行為は、各社会や宗教における生死の捉え方に大きく左右されると考えられる。脳死が人間の死であるかどうか、自己に死を決定する権限がある

か、遺体をどう捉えるかといった点は、意思の決定やその表示に関わりがあると予測されることから、対象者を取り巻く文化や信仰する宗教が臓器移植意思表示行動に影響を及ぼすのではないかと考えられてきた。

その中には、文化や宗教が、臓器提供に否定的であるという主張もある。例えば、日本において、波平(1990)は、日本人には遺体を大切に扱う伝統があるため、脳死を受け入れられないと論じた。同様に、梅原(1999)は、臓器移植は日本人の感性にとって不自然なものであり、受け入れられないと議論している。

一方で、文化や宗教と臓器提供意思表示行動の関係を直接結び付けることに否定的な研究もある。例えば中村(2006)は、韓国における儒教に伴う文化と臓器移植の関係について考察し、儒教文化は阻害要因ではないと結論付けた。峯村ら(2010)は韓国における宗教と「臓器提供を望ましいと考える」割合について検討した結果、違いは見られなかった。また、筆者らは、欧州8カ国(イギリス、スイス、スペイン、ドイツ、フィンランド、フランス、ベルギー、ポルトガル)を対象としたアンケート結果から、国レベルでの宗教と臓器提供数に一定の関係を見出すことはできないと論じた(瓜生原ら, 2004)。さらに、世界の主な宗教・宗派(カトリック、プロテスタント、ギリシャ正教会、クリスチャンサイエンス、ユダヤ教、エホバの証人、イスラム教、ヒンドゥー教、仏教)における臓器提供、臓器移植に対する考え方を概観し(表3)、これらは臓器提供を否定していないと結論づけている(瓜生原, 2012)。

表3 各宗教の臓器提供・臓器移植に対する考え方

宗教	臓器提供に対する考え方	臓器移植に対する考え方
カトリック	慈善, 兄弟愛, 自己犠牲の行為として推奨している。	倫理的, 道徳的に認められている。
プロテスタント	慈善行為として支持しているが, 各人の判断に任せている。	医療措置として適切なものであれば可。
ギリシャ正教会	人を救うためならば反対はしない。	レシピエントの幸福のために必要であれば何ら反対はしない。
クリスチャンサイエンス	各人の判断に任せている。ただし, 医学的な方法ではなく, 精神的な方法に頼る。	各人の判断に任せている。(臓器提供と同様)
ユダヤ教	支持し推奨している。	可
エホバの証人	個々人の良心を示す最善の方法として容認されている。	許可されているが, 他人からの輸血は禁止。
イスラム教	許可されており, 同意があれば可。	許可されている。
ヒンドゥー教	各人の判断に任せている。	各人の判断に任せている。
仏教	各人の良心に任せている	各人の良心に任せている。

注:『医療の組織イノベーション』瓜生原(2012), 124頁, 表5-3



イギリスの NHS Blood and Transplant (NHSBT) では、仏教、キリスト教、ヒンズー教、シーク教、ユダヤ教、イスラム教において、臓器提供がどのように捉えられているのか、その詳細をウェブサイトにおいてまとめている (NHSBT, n.d.)。限時点で掲載されているその詳細を見ると、上記の通り、いずれの宗教も臓器提供を否定していないことが分かる。以下では、その詳細を記述する。

仏教には、臓器提供を推奨する教えも、これを禁じる教えもない。状況によって判断されるべきものであるとされており、臓器提供に対する意見には幅がある。仏教において、人間の死は最大限の配慮と敬意を持って扱われるべき時間であり、死する人間の希望を尊重することが最も重要とされる。死者が臓器提供を希望していない場合には、臓器提供により他者の命を救うことによって、その希望を妥協することはできないが、苦痛を和らげることを中心とする仏教では、死にゆく者の願いである場合には、臓器提供は寛大さ (generosity) の行為として肯定される。

キリスト教において、臓器提供をするか否かは、個人的な選択によるものと理解されているが、それはお互いを愛し、他者のニーズを受け止めるというイエスキリストの教えを実践する行為であるとされている。永遠の命を信じるキリスト教徒にとって、死の前後に人間の身体に起こることは、どのようなことでも神との関係に影響を及ぼすものではなく、移植のプロセスはキリスト教の道德律において容認される行為である。

ヒンドゥー教の経典には、臓器提供を支持する言及が数多く見受けられる。その宗教的知識を集めた聖典類をヴェーダ (Vedas) の中で、医療に関するものの中には、臓器移植について論じている部分がある。またサンスクリット語の Dana は「無視無欲で与えること」を意味しているが、これは 10 の肯定的な義務や望ましい行動をリストした 10 のニヤマ (Niyamas) において 3 番目に掲載されている。

シーク教では、シーク教では、報酬や評価を求めず、無視無欲で他者に奉仕すること (seva) が重視されており、それは臓器を他者に提供することも含まれる。シーク教において、臓器提供に関連するタブーはない。死後の魂は永遠に転生すると考えられており、人間の身体はその長い旅路において使われるものと理解されているため、死の瞬間や死後に、すべての臓器が失われずに身体にある必要はないと考えられる。他者の生命のために自身の臓器を提供することは、他者に与えることのできる最善のものであり、人類に対する究極的な奉仕であると理解される。

ユダヤ教では、臓器提供をケースバイケースで判断する。死に際しては、身体への不必要な干渉を避け、迅速に埋葬することが重視されるが、死者の尊厳 (kavod hamet) を大切にし、死する者が臓器提供を希望する場合には、その希望が優先される。また死者の希望が判明している場合も、判明していない場合でも、残された家族が、ユダヤ教の権威に相談の上、最終的な判断を下すことがある。この場合、死者の尊厳を重視する

という教えとの一貫性に疑問を呈する声もあるが、残された者への慰め (nichum aveilim) も軽視されてはならないのである。臓器提供が可能となる状態の捉え方には、幅がある。心臓が停止したことを決定的な死と捉え、その時点で初めてドナーから臓器が取り出されることを認めるユダヤ教徒がいる一方、脳幹死の時点での臓器提供を受け入れるユダヤ教徒もいる。

イスラム教には、臓器提供について二つの考え方がある。一つには、生きている者であれ、死んでいる者であれ、人間の身体には敬意を表すべきであり、傷つけることは許されないという考え方がある。その一方で、必要性があれば禁じられていることも許容されるという考え方もあり、これにより臓器提供が支持されている。他者の命を救ったり、これを高めたりする上では、個人が失うものよりも、得られるものの方が多いという考え方である。またアッラーは、他者の命を救うものを大きく評価していることから、1995年に Muslim Law (Shariah) Council は、Shariah のルールに基づき、苦痛を和らげ、命を救う手段として、臓器提供を認めた。その際、医療専門家が死を判断すること、脳幹死の場合にも臓器提供を可能とすること、臓器提供は報酬なく行われるべきであること、臓器の取引は禁じられること、ムスリムはドナーカードを持たなければならないこと、ドナーカードがない場合や臓器提供の意思が確認できない場合には、最近親者が最終的な判断をすることなど、いくつかの重要な点を明確にしている。Council によるこの方針は、複数の権威あるイスラム教の協会、アカデミーに支持されている。

このように、仏教、キリスト教、ヒンズー教、シーク教、ユダヤ教、イスラム教のいずれにおいても、臓器提供は否定されていないのである。

## V. 2. 利他性

「誰かのために役に立ちたい」という思いや考えが、臓器提供の意思表示行動に肯定的な影響を及ぼすと論じる研究も数多く報告されている。利他的とは、自分の損失を顧みず他者の利益を図ることで、利己的の対義語であるが、例えば Morgan and Miller (2011) は、アメリカの成人を対象とした郵便調査から、利他性が臓器移植意思表示と相関関係にあることを明らかにしている。また Radecki and Jaccard (1997) は、利他性が意思表示行動の重要な動機付けになっていると報告している。

臓器提供は死後の良い結果を生む、臓器移植を待っている人の命を救う、誰かが臓器移植により恩恵を受けるなどの思いは、臓器提供に賛成の態度を促すと報告されている (Cleveland and Johnson, 1970; Moores et al., 1976; Corlett, 1985; Parisi and Katz, 1986; Batten and Prottas, 1987; McIntyre et al., 1987; Basu et al., 1989; Batten, 1990; Peters et al., 1996)。また、意思表示と属性の関係についての研究結果から、臓器提供に賛成する割合が高いのは、中高年の女性 (Pessemier et al., 1977)、教育レベルと社会経済的地

位が高い人（Cleveland and Johnson, 1970；Pessemier et al., 1977；Parisi and Katz, 1986）という傾向が認められているが、その背景にはこれらの属性の人々が、より利他的な意識が高いことが介在していると考察されている。

利他性に関わるものとして、「他者指向性」の共感が挙げられる。そこには、常に相手の立場で考える「視点取得」、困っている人がいるとその人の問題が早く解決するといいなあとと思う「共感的配慮」があり、これらは寄付の意向と相関すると報告されている（桜井, 1988）。

ただし、利他性の背景には、「誰かのために役に立っている」ということを「見せつける」という気持ちが働いている可能性もある。Grace and Griffin（2006）は、共感を示すリボン（Empathy Ribbon）をはじめとするチャリティグッズの購入は、利他的な目的よりも、他者にこれを見せつけることを目的としており、ここに「人目に付く共感（conspicuous compassion）」が働いていると論じた。

### V. 3. 規範・役割アイデンティティ

「誰かのために役に立ちたい」という利他的な考えに加え、「誰かのために役に立つことは良いことだ・望ましいことだ」という規範的な考えもまた、臓器提供意思表示行動に影響を及ぼすと考えられる。

その考え方の一つとして、援助規範が挙げられる。その中には、自分が不利になっても困っている人を助ける「自己犠牲」、自分より悪い境遇の人に何かを与えるのは当然と考えられる「弱者救済」がある。献血を行う人は自己犠牲、ボランティアは弱者救済の意向が高いと報告されている（箱井・高木, 1987）。

また、こうした援助規範が、人間のアイデンティティの中で果たす役割に着目した研究も行われている。社会の中で自分が果たしている、あるいは果たすべきと考える役割に、自らのアイデンティティをどの程度見出しているかという点を捉える概念として、「役割アイデンティティ（role identity）」があるが、White et al.（2017）は、「金銭を提供する寄付者としてのアイデンティティ」、「時間を提供するボランティアとしてのアイデンティティ」、「献血ドナーとしてのアイデンティティ」、を強く持つ人の方が、そうではない人に比べて、実際にそれぞれの行動を起こす確率が高いことを明らかにしている。

援助規範や役割アイデンティティは、その行動を起こした際に、他者がどのように評価するかという認識が基盤となっている。そのため、こうした規範的な考え方は、家族や友人が対象者の言動に対してどう思うかという点に左右される。Cleveland and Johnson（1970）の研究では、臓器提供に反対の意思を示している人の主な理由は「家族が臓器提供に反対しているから」であることが明らかとなっており、また Coelett

(1985)の研究では、臓器摘出のために体が傷つけられることが臓器提供を拒否する理由とされている。個々人の拠り所とする集団での規範的な考えは、少なからず、個々人の考えに影響しているという示唆が導かれている。

#### V. 4. 知識

個人の属性や持ち合わせている事柄と臓器移植意思行動に関する研究の中で、これまで最も多くの注目を集めてきたのが「知識」である。実に多くの研究が、臓器提供に関連する正しい知識を持つことが、意思表示行動に肯定的な影響を及ぼすと結論付けている。

その背景には、一般の人々が臓器提供に関する知識について誤解をしているという実態がある。死亡する前に臓器が摘出される、時期を早めて死を宣告される、生命維持装置が移植のために必要以上に長く装着される、臓器摘出により遺体が大きく損傷される、脳死から生き返るなど、誤解があることを、数多くの研究が報告している (Cleveland and Johnson, 1970; Moores *et al.*, 1976; Corlett, 1985; Hessing and Elffers, 1986; Parisi and Katz, 1986; McIntyre *et al.*, 1987; Basu *et al.*, 1989; Nolan and Spanos, 1989; Wakeford and Stepney, 1989; Gallup, 1993)。

Peters *et al.* (1996) では、臓器提供ドナーになりたいかとの質問に対して賛成した 51 名と反対した 51 名の相違点について検討したところ、反対した人々は、移植医療、特に臓器分配の公平性についての強い不信感を抱き、移植医療のレシピエントへの有用性についての疑いを持ち、脳死の概念の受容が低いことが示された。臓器提供に関する理解不足、あるいは誤解が、臓器提供への否定的な意識につながっていることが示唆される。

また Horton and Horton (1990) は、ある町の 465 名の住人と 481 名の学生を対象に、移植に特化した知識と臓器提供に対する考え方の関係について調査を行った。その結果、臓器提供に否定的な人々は、3つの理解不足が共通していた。第一に、臓器提供は宗教により否定されていると誤解していたこと。第二に、80%の人々がドナーには心臓死が必須であると回答するなど、脳死の理解が不十分であったこと。第三に、73%の人々が保健省に登録をしないとドナーカードが有効でないと回答したなど、ドナーカードの取り扱いについて誤解があったことである。このことから、臓器移植および臓器提供に関する正しい知識と、臓器提供に対する考え方は、有意に相関すると結論づけている。

臓器提供に関する誤解が多いということは、見方を変えれば、正しい知識を増やしていくことによって、臓器提供に対する考え方がポジティブに転換するということでもある (Shulz *et al.*, 2000)。教育レベルが高く、臓器提供に関する規則の認知度が高い人ほ

ど、臓器提供の意思表示率が高いという報告もある（Mossialos et al., 2008）。またトルコの大学生の間では、経済的な豊かさ、母親の教育レベル、医療分野に従事している親戚の有無に加え、意思表示に関して十分な知識を有していると感じていか否かが、臓器移植への意思表示や考え方に影響を及ぼしていることが明らかとなっている（Sönmez et al., 2010）。これらの研究成果から、臓器提供に関する正しい「知識」を提供することは重要であると考えられる。

## VI 行動に影響を及ぼす因子（2）：作用メカニズム

人間が有する文化・宗教、利他性、援助規範、知識は、自動的に臓器移植意思表示へとつながっていくわけではない。これらを行動変容へと結びつけるメカニズムに着目した。価値観や知識は、人間の内部においてどのように意思表示へとつながっていくのか、そのプロセスに焦点を当てた研究に関しては、心理学の分野で提唱され、その後コミュニケーション学をはじめとする様々な分野において数多くの研究が適用してきた「計画的行動理論」が重要である。この理論を中心に、関連する研究とその成果をレビューする。

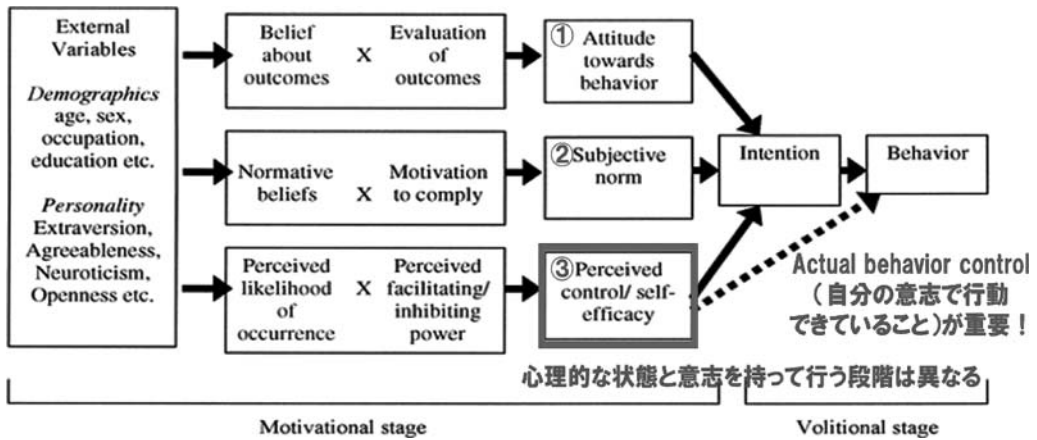
### VI. 1. 計画的行動理論

計画的行動理論（Theory of Planned Behaviors）とは、心理学分野で Ajzen（1985）が提唱した理論である（図4）。人間の行動は、「意図（intention）」に基づいて行われるものであり、その「意図」は、「その行動に対する個人の態度（attitude）」「他者が、自分がその行動をとることに賛成するかどうか（subjective norm：主観的規範）」「自分がその行動をコントロールできると考えるかどうか（perceived control：行動コントロール感）」の3点に主に左右されると理解する。この3点から形成される意図が、実際の「行動（behavior）」につながるという考え方である。

計画的行動理論は、人間の行動を捉える上で、属性や習慣よりも、行動を取る意図を重視した合理的行動理論（Theory of Reasoned Action, Fishbein and Ajzen, 1975）を発展させ、行動コントロール感の要素を追加して形成されたものである。人間の行動変容を説明、予測する上で有用な理論であると考えられ、多数の研究がその有用性を検証すると同時に、理論の発展を図ってきた。

「臓器提供の意思表示行動」における計画的行動理論について概観すると、Powpaka（2008）は3つの要因の中でも、「態度」が臓器提供意思表示を左右する最大の要因となっており、また「態度」は、臓器提供がもたらす結果の認識（perceived consequences of donating organs）の影響を受けることを明らかにしている。行動の「意図」に大きな影

図4 計画的行動理論



出所：Ajzen (1985) の図を筆者が改編

響を及ぼす要素は、国によって異なる可能性も示唆されている。計画的行動理論を適用し、日本、韓国、米国の大学生を対象とした比較分析を行った Bresnahan et al. (2007) は、すべての国において「態度」が意思表示の「意図」を左右する要素となっていることが明らかにしたが、例えば日本の大学生に限っては、「行動コントロール感」も、「意図」を左右する大きな要因となっているという結論を導き出している。また Wu and Tang (2009) は、米国、香港、日本の大学生を対象に、臓器提供に対する「態度」と「主観的規範」と、臓器移植に関する家族とのコミュニケーションの関連性を比較検証した。その結果、日本の大学生は、臓器提供に対して最も低い「態度」と「主観的規範」を有しており、家族と話す確率が最も低いということが分かった。

Brietkopf (2006) は、「行動コントロール感」に関連する分析結果を報告している。米国の大学生を対象に、自身の臓器提供の意図について両親に打ち明けるかどうかについて調査したところ、自身の決断が変わる可能性がある、あるいは誤った決断をしたと考えている場合は、両親に打ち明ける可能性が低くなる一方、自身の決断を揺るぎのないものを捉えている学生は、両親に打ち明ける可能性が高いことが分かった。さらに献血という向社会行動について、計画的行動理論を適用した Reid and Wood (2008) は、「主観的規範」と「行動コントロール感」が、時間に関する障害とともに、ドナーにならない者の意図に関連していることを明らかにしている。

以上より、自身で決定することに自信や誇りをもつなど行動をコントロールできている感覚が重要であることが示唆された。

## Ⅶ 行動に影響を及ぼす因子（3）：外部からの介入方法

人間が有する価値観や知識を所与のものとして捉え、それらが行動意図にどのように作用するかを説明・予測するのではなく、人間の行動を変容させることに重きを置き、どのような外部からの介入が行動変容へとつながるのかを検討した研究も数多く見られる。以下、情報の提示方法、情報の伝達媒体、コミットメント、金銭的インセンティブの提供、家族との話し合いの効果の4視座からレビューする。

### Ⅶ. 1. 選択アーキテクチャ（ナッジ）

Thaler and Sunstein（2008）は、ナッジを「選択を禁じることも、経済的なインセンティブを大きく変えることもなく、人々の行動を予測可能な形で変える選択アーキテクチャーのあらゆる要素」と定義している（セイラー・サンステーン（2009）、邦訳版 p.17 より引用）。そこで強調されていることは、ナッジは命令ではなく、介入を低コストで避けることができるものでなければならないという点である。

臓器提供を増加させる文脈で、臓器提供方式を explicit consent (opt-in) から presumed consent (opt-out) に変更するナッジが有効と報告されている（Thaler and Sunstein, 2008）。提供に関して「意思決定と表示行動を主体的に行う」環境から、「特に反対でなければ行動しなくてもいい」環境に変化したためであり、当然と推察される。実際、オーストリア（Gnant, 1991）、ベルギー（Roels, 1991；Vanrenterghem *et al.*, 1998）、シンガポール（Soh and Lim, 1992；Low *et al.*, 2006）では臓器提供数が増加しているが、同時に院内体制の整備を行って始めて増加したのが現状である。

また、2015年12月、英国においてウェールズ州で初めて presumed consent へと変更されたが、変更後直ちに提供は増加していない。ウェールズ州の一般市民の意識変化が、新しい制度の実効性に結び付いているかどうかについて分析した結果、肯定的な態度が採られる要因として、①家族と対話し、意思表示への関心を高め、態度決定しておくこと、②制度に対する正確な知識を提供し、理解度を高めること、③各自にとって「役に立つ」と思う多様な意思表示行動への価値を醸成することの必要性が確認された（瓜生原, 2017）。

すなわち、本方法をとる場合においても、十分に家族と対話し、意思表示への関心を高め、意思決定をしておくことが基本であり、以降に述べる根源的な方法が不可欠と考えられる。

## VII. 2. 情報の提示方法

情報の提示方法について有効な概念に、Goffman (1974) が提唱した「フレーム・フレーミング」がある。フレーミングとは、「認知された現実のいくつかの側面を選び、これを強調すること」である (Entman, 1993)。代表的なものとして、望ましい行動を取ることによって「得られるもの」を強調するポジティブな「利得フレーム (gain frame)」と、望ましい行動を取られないことによって「失わせるもの (loss frame)」を強調するネガティブな「損失フレーム (loss frame)」がある (Tversky and Kahneman, 1981)。

Chien and Chang (2015) は、台湾において、4 パターンのメッセージ (ポジティブ×統計、ネガティブ×統計、ポジティブ×ストーリー、ネガティブ×ストーリー) を対象者に提示し、いずれかを読ませ、自身の意思表示への気持ちを7段階で回答させる実験を行った。その結果、「統計」よりも「ストーリー」を読んだ人の方が意思表示に肯定的であり、「ネガティブ×ストーリー」のメッセージが有効であるとの結論が得られた。

韓国においては、Sun (2014) が、大学生を対象に、4 パターンの公共広告 (ポジティブ×合理的、ネガティブ×合理的、ポジティブ×感情的、ネガティブ×感情的) のいずれかを読ませ、臓器提供への態度や意思を回答させる実験を行った。ポジティブな広告を見た対象者は、臓器提供に肯定的な態度を示し、また感情的な広告を見た人の方が、臓器提供に対して高い意思を見せることが明らかとなった。このプロセスにおいて、利他性の程度、セルフモニタリングの程度、および問題への関与の程度が中間変数として作用していることも示されている。

Skumanich and Kintsfather (1996) は、大学生を対象に、これまでのメッセージに関連する研究から最も効果的であると考えられる、「臓器提供を肯定するポジティブなメッセージ」と「恐怖心を否定する文章」を組み合わせたものを提示する実験を行った。二つに分けられた対象者の片方には、これを提示する前に、移植を受ける患者の感情的なストーリーに基づくナラティブを提示した。その結果、臓器提供に対する関与の程度、および行動意図が高まった。当事者の物語は、共感を呼び起こすきっかけとして有効であることが示唆された。

また、臓器移提供に類似する行動として、卵母細胞の提供行動についても研究されている。Purewal and van den Akker (2010) は、イギリスと南東アジアの女性を対象に、「利得フレーム (gain frame)」と「損失フレーム (loss frame)」の有効性を検証した。その結果、「利得フレーム」のメッセージの方が、意思を表明する確率が高いことが分かったが、その効果はイギリスの女性においてのみ観察された。また骨髄ドナーの登録促進に注目した Studts *et al.* (2010) の報告では、米国において、感情的なアピールと合理的なアピールの有効性が比較検討され、前者の方が効果的であるという結論を得



た。

このように、メッセージを工夫することで、臓器提供の意思表示を促す効果が期待されることが研究から明らかとなっている。しかし、Chien（2014）は、15カ国53枚の臓器提供に関するポスターを分析し、その多くが直接的な訴えしか行っておらず、フレームの有効性が反映できていないと報告している。この研究では、グラフィックや文章を合わせることで、セレブリティを登場させることで、知識と統計を提供すること、臓器移植をめぐる誤解を解くこと、ナラティブを使うこと、成功した移植のケースを提示すること、公共の福祉や他人の福祉を強調することなどを、「利得フレーム」と組み合わせて提示することにより、より効果的な行動変容ができると提言している。

### VII. 3. 情報の伝達媒体

臓器移植意思表示に関する情報をどのような媒体で対象者に届けるかという観点からも、研究が進められている。

最も多くの人々にアプローチできる媒体に、テレビや新聞などのマスメディアがある。オーストラリアにおける12カ月間のスポットテレビシリーズ（Thomson, 1993）、フランスロレーヌ地区における1週間の新聞、テレビなどのキャンペーン（Jacob, 1996）が研究されてきたが、いずれも意思表示の増加にはつながっていないという結論を導いている。

その他の研究では、効果を高めるために、対象者を絞り、長期間実施し、かつ能動的な行動を促すしかけと組み合わせる必要性が示唆されている。例えば、米国ワシントンでマイノリティを対象に、マスメディアと講演など身近な情報提供の組み合わせを15年間実施したところ、意思表示をする人々と実際の臓器提供者が増加した（Callender *et al.*, 1997）との報告がなされている。

近年では、ソーシャル・メディアも有効なツールとして注目されている（Peter *et al.*, 1996；Feeley, 2009）。例えばCameron *et al.*（2013）は、2012年5月1日より、FacebookのProfileの一部として「臓器提供者（Organ Donor）」が追加されたことに着目し、こうした機会の創出により、米国でのドナー登録者が大幅に増えたことを、州ごとのデータから明らかにしている。

複数の媒体によるアプローチを比較研究したStefanone *et al.*（2012）は、3年間に渡って、3つの異なるタイプのオンラインキャンペーンを実施した。一つ目は従来型のオンライン広告、二つ目は、意識の高い学生が、SNSを通じて臓器提供を推進する形、三つ目はドナー登録数をチーム対抗で競うチャレンジ・キャンペーンであった。主な対象者は大学生であったが、従来型のオンラインキャンペーンが、メッセージへの接触という点では最大の効果をもたらしたものの、サイト訪問者がドナー登録する比率にはつ

ならなかったという結論を得ている。一方、学生による SNS での情報発信とチャレンジ・キャンペーンは、プロジェクトのウェブサイトへの注目、ドナーカードのリクエストと提出につながった。

#### VII. 4. コミットメント (関与の程度)

臓器移植意思表示を促す上で、本課題について関与する機会を提供することが効果的であるという研究が行われている。臓器提供について考えるという作業に費やした時間とエネルギー、すなわち「関与の程度 (コミットメント)」が行動を起こすと報告されている (Skumanich and Kintsfather, 1996)。

例えば、ドナーカードに意思を記入する前に、臓器提供に関する簡単な質問に答える形式をとった場合は、とらなかった場合より、提供を希望する人が多かった (Cardcci *et al.*, 1984, 1989)。質問に答えることにより、臓器提供について考える時間を費やしたためだと解釈できる。

また「関与の程度」が高い時に、意思表示手段を組み合わせて提供することも重要である。Holton and Horton (1990) が、ドナーカードの入手方法を知らないことが、意思表示の障壁となっていると論じている通り、意思表示への意図が高まったとしても、それを表示する手段がなければ、意思表示という行動にはつながらない。

Sanner *et al.* (1995) の研究は、関心が高まったタイミングで意思表示の手段を提供することの重要性を示唆する結果を導いている。スウェーデンのある地域において、5,600 名を 4 群に分け、臓器提供キャンペーン、ドナーカードの配布、そして臓器提供に対する態度の関係について検証した研究である。A 地区では講演、テレビ、ポスター、討議グループを用いた大規模キャンペーンを 3 カ月以上実施、B 地区ではドナーカードと臓器提供に関する情報冊子を送付、C 地区では両方を実施、D 地区は何も実施しない (コントロール) とした。介入実施前と実施後のドナーカードの所持率を比較したところ、A 地区は 5%→5%、B 地区は 5%→12%、C 地区は 3%→13%、D 地区では 7%→5% となった。キャンペーンを実施するだけでは、意思表示にはつながらず、関心が高まったタイミングで意思表示の手段を入手することで、「意思を表示する」という行動につながることを示された。

以上のように、「関与の程度」を高めた上で、意思表示の手段を提供することが重要であると考えられる。

#### VII. 5. 褒賞・報奨金の提供

臓器提供意思表示に対する褒賞を導入することで、人々の行動変容を促進できるかどうかを検討する研究も進められている。

献血という高関与型向社会行動では、Lacetera and Macis（2010）が、イタリアにおいて一定回数献血を行った人にメダルを授与することの効果を検証している。メダルを獲得できる献血回数が近づくにつれ、献血の頻度が高くなることが明らかとなった。その際、メダルの授与が新聞等、公の場所で公表されることが重要であるという結論を導いた。同じく献血に対する記念品授与の効果に関する研究を行った Chell and Mortiner（2014）も、社会的な価値に重きを置くドナーの方が、記念品等の褒賞を伴った献血行動を取る傾向を明らかにしている。しかし、臓器提供の意思決定や表示は頻回に行うものではないため、そのまま適用するのは好ましくない。

多くの研究は、金銭的インセンティブの導入には倫理的に強い反発があり（Chkhoutua, 2012）、行動変容には効果がないという結論を導いている（Pessemier *et al.*, 1977; Davidson and Devney, 1991）。Cosse and Weisenberger（1999）は、米国において臓器提供への金銭的インセンティブを導入することにおいて、人々の考えや感情が時間の経過とともに変化するか否かを問い、南東部での調査結果から、これが全面的に支持されているわけではないことを明らかにした。オーストラリアでの調査においても、Mayrhofer-Reinhartshber *et al.*（2006）が、強いマイナスの反応を誘発する介入方法であることと論じている。韓国の文脈では、Ahn and Park（2016）が報奨の種類や行動変容のステージなどから検証している。

しかし、金銭的インセンティブを全面的に否定するのではなく、例えば葬式費用の負担や寄付という形で補填することを提唱する研究もある（Arnold *et al.*, 2002）。本介入方法については、慎重に議論することが必要と考えられる。

## VII. 6. 家族との対話の促進

家族と臓器提供に関するコミュニケーションを促すことが、意思表示に関する判断の促進につながるという研究もある。Afifi（2007）は、情報マネジメント理論（Theory of Information Management）を適用し、臓器提供に関する意思決定を、一個人によるプロセスではなく、双方向的に家族とともに説得していくプロセスとして捉え、これを前提とした介入をデザインすることを提唱している。

## VIII 外的環境因子

以上、各個人の行動変容促進へのアプローチを中心に研究をレビューした。しかしながら、Healy（2006）が、米国の各地域における臓器提供の差異を構造的、組織的特徴による違いから説明し、利他性をはじめとする個人的な動機だけでは説明できないと結論付けたように、対象者を取り巻く外的な環境も、対象者の臓器提供意思表示に対する意

図や実際の行動に大きな影響を及ぼす重要な要因である。

こうした外的環境の一つに、人々の臓器提供の意思を、実際に臓器提供に結びつける仕組みの整備が挙げられる。瓜生原(2012)は、その仕組みとして、以下5点の重要性を指摘している。第一に、臓器提供をめぐる法律や制度である。臓器提供に対する意思表示をどのように取り扱うかという点は、各国の法律によって定められている。特に臓器提供方式がどのように定められているかによって、人々の行動は影響を受けると考えられる。第二に、臓器提供に関わる多様な人々をつなぐ国家的なネットワーク体制や、関係するスタッフの教育体制の整備が重要である。また、この体制を支える上で十分な予算が確保されているか否かも要因の一つである。第三に、病院内の体制も考慮する必要がある。病院内のプロセスが、ドナーとレシピエントを円滑に結びつけるプロセスとなっているか否かが鍵を握る。第四に、病院内の人材確保と、教育・訓練によるプロフェッショナルの育成が挙げられる。最後に、家族からの承諾を得るステップにおいて、誰が、どのようなタイミングで、どのように臓器提供のオプションを提示したのかが重要である。

## IX ま と め

以上、高関与型向社会行動としての「臓器提供への意思決定と意思表示」に関する行動変容について、価値観や知識、価値観や知識の作用メカニズム、外部からの介入方法の3つの視座に着目している先行研究を学際的にレビューし、整理した。

いずれの研究も非常に重要な視点や示唆を提供しているが、「臓器提供の意思決定と意思表示」を効果的に推進していくためには、これらを体系的に把握・説明すると同時に、行動変容に向けた介入手法とその有効性を網羅的に議論する必要がある。我々が把握する限りにおいて、これを体系的に説明すると同時に、網羅的に議論した研究は世界的に行われていない。

したがって、本一連の研究により、「臓器提供の意思決定と意思表示」に関する最適化モデルを構築・検証することは世界的にも重要な試みであり、臓器提供意思表示のみならず、その他の高関与型向社会行動のメカニズムに関する研究の礎となることが期待できる。本稿にて、その基本となる文献的考察を行ったため、今後、包括的な視点から、先行研究を踏まえた具体的な介入を複数デザインし、これを実践することによって、臓器移植意思表示行動、さらには高関与型向社会行動の最適化モデルを構築していきたい。

関する実証研究』(代表研究者: 瓜生原葉子), 吉田秀雄記念事業財団助成『ソーシャルマーケティングによる移植医療の課題解決: 臓器提供意思表示率の向上』(代表研究者: 瓜生原葉子), およびの支援を受けた研究成果の一部である。

【記2】本研究への示唆を賜った岡田彩先生(東北大学大学院情報科学研究科)に衷心より謝意を表したく存じます。

#### 参考文献

- Afifi, W. A., Morgan, S. E., Stephenson, M. T., Morse, C., Harrison, T., Reichert, T., and Long, S. D. (2007) "Examining the Decision to Talk with Family About Organ Donation: Applying the Theory of Motivated Information Management," *Communication Monographs*, Vol.73(2), pp.188-215.
- Ahn, J., and Park, H. S. (2016) "Reward for Organ Donation: Is It Effective or Not as a Promotion Strategy?" *International Journal of Nonprofit and Voluntary Sector Marketing*, Vol.21, pp.118-129.
- Andreasen, A. R., & Kotler, P. (2007). *Strategic marketing for nonprofit organizations* (7th ed.). Prentice Hall.
- Arnold, R. Barlett, S., Bernat, J., Colonna, J. Dafeo, D., and Dubler, N. (2002) "Financial Incentives for Cadaver Organ Donation: An Ethical Reappraisal," *Transplantation*, Vol.73(8), pp.1361-1367.
- Azjen, I. (1985) "From Intentions to Actions: A Theory of Planned Behaviors," In Kuhl, J. and Beckman, J. (Eds.). *Action-control: From Cognition to Behavior* (pp.11-39), Heidelberg, Germany: Springer.
- Bart, K. J., Macon, E. J., Humphries, A. L., Baldwin, R. J., Fitch, T., Pope, R. S., Rich, M. J., Langford, D., Teutsch, S. M., and Blount, J. H. (1981) "Increasing the Supply of Cadaveric Kidneys for Transplantation," *Transplantation*, Vol.31, No.5, pp.383-387.
- Basu, P. K., Hazariwala, K. M., and Chipman, M. L. (1989) "Public Attitudes toward Donation of Body Parts, particularly the Eye," *Canadian Journal of Ophthalmology*, Vol.24, No.5, pp.216-220.
- Batten, H. L. (1990) "The social Construction of Altruism in Organ Donation," in Shanteau, J. and Harris, R. J. (Eds.), *Organ Donation and Transplantation: Psychological and Behavioral Factors*, pp.83-96, Washington DC: American Psychological Association.
- Batten, H. L. and Prottas, J. M. (1987) "Kind Strangers: The Families of Organ Donors," *Health Affairs*, Vol.6, No.2, pp.35-47.
- Bresnahan M., Lee, S., Smith, S., Shearman, S., Park C., and Yoo, J. (2007) "A Theory of Planned Behavior Study of College Students' Intention to Register as Organ Donors in Japan, Korea, and the United States," *Health Communication*, Vol.21(3), pp.201-211.
- Brietkopf, C. R. (2006) "Perceived Consequences of Communicating Organ Donation Wishes: An Analysis of Beliefs about Defending One's Decision," *Psychology and Health*, Vol.21, pp.481-497.
- Burroughs, T. E., Hong, B. A., Kappel, D. A., and Freedman, B. K. (1998) "The Stability of Family Decisions to Consent or Refuse Organ Donation: Would You Do It Again?" *Psychosomatic Medicine*, Vol.60, No.2, pp.156-162.
- Callender, C., Burston, B., Yeager, C. and Miles, P. (1997) "A National Minority Transplant Program for Increasing Donation Rate," *Transplantation Proceedings*, Vol.29, pp.1482-1483.
- Cameron, A. M., Massei, A. B., Alexander, C. E., Stewart, B., Montgomery, R. A., Benavides, N. R., Fleming, G. D., and Segev, D. L. (2013) "Social Media and Organ Donor Registration: The Facebook Effect," *American Journal of Transplantation*, Vol.13, pp.2059-2065.
- Carducci, B. J. and Deuser, P. S. (1984) "The Foot-in the Door Technique: Initial Request and Organ Donation," *Basic and Applied Social Psychology*, Vol.5, No.1, pp.75-81.
- Carducci, B. J., Deuser, P. S., Bauer, A., Large, M., and Ramaekers, M. (1989) "An Application of The Foot in The Door Technique to Organ Donation." *Journal of Business and Psychology*, Vol.4, No.2, pp.245-249.
- Cerney, M. S. (1993) "Solving the Organ Donor Shortage by Meeting the Bereaved Family's Needs," *Critical Care Nurse*, Vol.13, No.1, pp.32-36.

- Chell, K. and Mortimer, G. (2014) "Investigating Online Recognition for Blood Donor Retention : An Experimental Donor Value Approach," *International Journal of Nonprofit and Voluntary Sector Marketing*, Vol.19 (2), pp.143-163.
- Chien, Y. H. (2014) "Organ Donation Posters : Developing Persuasive Messages. *Online Journal of Communication and Media Technologies*," Vol.4(4), pp.136-153.
- Chien, Y. H. and Chang W. T. (2015) "Effects of Message Framing and Exemplars on Promoting Organ Donation. *Psychological Reports*," Vol.117(3), pp.692-702.
- Chkhoutua, A. (2012) "Incentives for Organ Donation : Pros and Cons. *Transplantation Proceedings*," Vol.44, pp.1793-1794.
- Cleveland, S. E. and Johnson, D. L. (1970) "Motivation and Readiness of Potential Human Tissue Donors and Nondonors," *Psychosomatic Medicine*, Vol.32, No.3, pp.225-231.
- Marketing : New Vistas for Nonprofit and Public Sector Management, New York : Routledge.
- Corlett, S. (1985) "Public Attitudes toward Human Organ Donation," *Transplantation Proceedings*, Vol.17, pp.103-110.
- Cosse, T. J. and Weisenberger, T. M. (1999) "Encouraging Human Organ Donation : Altruism versus Financial Incentives," In Wymer, W. W. and Self, D. R. (Eds.). *Volunteerism*
- Creecy, R. F. and Wright, R. (1990) "Correlation of Willingness to Consider Organ Donation Among Blacks," *Social Science & Medicine*, Vol.31, pp.1229-1232.
- Davidson, M. N. and Devney, P. (1991) "Attributed Barriers to Organ Donation among Black Americans," *Transplantation Proceedings*, Vol.23, pp.2531-2532.
- De Jong, W., Franz, H. G., Wolfe, S. M., Nathan, H., Payne, D., Reitsma, W. and Beasley, C (1998) "Requesting Organ Donation : An Interview Study of Donor and Nondonor Families," *American Journal of Critical Care*, Vol.7, No.1, pp.13-23.
- Entman, R. M. (1993) "Framing : toward clarification of a fractured paradigm," *Journal of Communication* 43 (4) : 51-58.
- Evanisko, M. J., Beasley, C. L., Brigham, L. E., Capossela, C., Cosgrove, G. R., Light, J., Mellor, S., Poretzky A., and McNamara, P. (1998) "Readiness of Critical Care Physicians and Nurses to Handle Requests for Organ Donation," *American Journal of Crit Care*, Vol.7, No.1, pp.4-12.
- Feeley, T. H and Shin-Il Moon. (2009) "A Meta-Analytic Review of Communication Campaigns to Promote Organ Donation". *Journal Communication Reports Volume 22*, pp 63-73.
- Feldman, E. A. (1988) "Defying Death : Organ Transplants, Tradition and Technology in Japan," *Social Science & Medicine*, vol. 27, pp.339-343.
- Frutos, M. A., Blanca, M. J., Mansilla, J. J., Rando, B., Ruiz, P., Guerreroa, F., López, G., and Ortuño, C. (2005) "Organ Donation : A Comparison of Donating and Nondonating Families," *Transplantation Proceedings*, Vol.37, No.3, pp.1557-1559.
- Gallup Organization. (1993) *The American Public's attitudes towards Organ Donation and Transplantation*, Boston : The Partnership for Organ Donation.
- Garrison, R. N., Bentley, F. R., Raque, G. H., Polk, H. C. Jr., Sladek, L. C., Evanisko, M. J., and Lucas, B. A. (1991) "There is an answer to the shortage of organ donors," *Surgery Gynecology and Obstetrics*, Vol.173, No.5, pp.391-396.
- Gnant, M. F., Wamser, P., Goetzinger, P., Sautner, T., Steininger, R., and Muehlbacher, F. (1991) "The Impact of the Presumed Consent Law and a Decentralized Organ Procurement System on Organ Donation : Quadruplication in the Number of Organ Donors," *Transplantation Proceedings*, Vol.23, pp.2685-2686.
- Goffman, E. (1974) *Frame Analysis*, Harper Colophon Books, New York.
- Gortmaker, S. L., Beasley, C. L., Sheehy, E., Lucas, B. A., Brigham, L. E., Grenvik, A., Patterson, R. H., Garrison, N., McNamara, P., and Evanisko, M. J. (1998) "Improving the Request Process to Increase Family

- Consent for Organ Donation,” *Journal of Transplant Coordination*, Vol.8, No.4, pp.210-217.
- Grace D. and Griffin, D. (2006) “Exploring Conspicuousness in the Context of Donation Behavior,” *International Journal of Nonprofit and Voluntary Sector Marketing*, Vol.11 (2), pp.147-154.
- Harris, R. J., Jasper, J. D., Lee, B. C., and Miller, K. E. (1991) “Consenting to Donate Organs : Whose Wishes Carry the Most Weight?” *Journal of Applied Social Psychology*, Vol.21, No.1, pp.3-14.
- Helms, A. K., Torbey, M. T., Hacein-Bey, L., Chyba, C., and Varelas, P. N. (2004) “Standardized Protocols Increase Organ and Tissue Donation Rates in the Neurocritical Care Unit,” *Neurology*, Vol.63, No.10, pp.1955-1957.
- Hessing, D. J. and Elffers, H. (1986) “Attitude towards Death, Fear of Being Declared Dead Too Soon, and Donation of Organs after Death,” *Omega : Journal of Death and Dying*, Vol.17, No.2, pp.115-124.
- Horton, R. L. and Horton, P. J. (1990) “Knowledge regarding Organ Donation : Identifying and Overcoming Barriers to Organ Donation,” *Social Science & Medicine*, Vol.31, No.7, pp.791-800.
- Jacob, F. (1996) “Regional Awareness Campaign concerning Organ Sharing.” *Transplantation Proceedings*, Vol.28, pp.393.
- Jasper, J. D., Harris, R. J., Lee, B. C., and St. Miller, K. E. (1991) “Organ Donation Terminology : Are We Communicating Life or Death?” *Health Psychology*, Vol.10, pp.34-41.
- Jenkins, D. H., Reilly, P. M., and William, C. S. (1999) “Improving the Approach to Organ Donation : A Review,” *World Journal of Surgery*, Vol.23, No.7, pp.644-649.
- Kliger, J., K Nelson, R Davis, C Van Buren, K Davis (1994) “Analysis of factors influencing organ donation consent rates,” *Journal of Transpl Coordinator*.
- Kotler, P., & Andreasen, A. R. (2003). *Strategic marketing for nonprofit organizations* (6ed.). Prentice Hall. (井関利明 (監訳) (2005). *非営利組織のマーケティング戦略 第6版 第一法規*)
- Kozlowski, L. M. (1988) “Case Study in Identification and Maintenance of an Organ Donor,” *Heart and Lung*, Vol.17, No.4, pp.366-371.
- Lacetera, N. and Macis, M. (2010) “Social Image Concerns and Prosocial Behavior : Field Evidence from a Nonlinear Incentive Scheme,” *Journal of Economic Behavior and Organization*, Vol.76, pp.225-237.
- Linyear, A. S. and Tartaglia, A. (1999) “Family Communication Coordination : A Program to Increase Organ Donation,” *Journal of Transplant Coordination*, Vol.9, No.3, pp.165-74.
- Mayrhofer-Reinhartshber D, Fitzgerald A, Benetka G, Fitzgerald R. (2006) “Effects of Financial Incentives on the Intention to Consent to Organ Donation : A Questionnaire Survey,” *Transplantation Proceedings*, Vol.38, pp.2756-2760.
- McIntyre, P., Barnett, M. A., Harris, R. J., Shanteau, J., Skowronski, J., and Klassen, M. (1987) “Psychological Factors Influencing Decisions to Donate Organs,” In Wallendorf, M. and Anderson, P. (Eds.), *Advances in Consumer Research*, Vol.14, pp.331-332.
- Meisler, S. H., and Trachtman, H. (1989). “Parental Attitudes toward Organ Donation,” *Pediatric Nephrology*, Vol.3, pp.86-88.
- Moore, B., Clarke, G., Lewis, B. R., and Mallick, N. P. (1976) “Public Attitudes towards Kidney Transplantation,” *British Medical Journal*, No.1, pp.629-631.
- Morgan, S. and Miller, J. K. (2011) “Communicating about Gifts of Life : The Effect of Knowledge, Attitudes, and Altruism on Behavior and Behavioral Intentions Regarding Organ Donation,” *Journal of Applied Communication Research*, Vol.30 (2), pp.163-178.
- Mossialos, E., Costa-Font, J., and Rudisill, C. (2008) “Does Organ Donation Legislation affect Individuals’ Willingness to Donate Their Own or Their Relative’s Organs? Evidence from European Union Survey Data.” *BMC Health Services Research*, Vol.8, pp.48-57.
- NHS Blood and Transplant (n.d.). What Does My Religion Say? Last accessed March 31, 2019 at <https://www.organdonation.nhs.uk/about-donation/what-does-my-religion-say/>

- Niles, P. A. and Mattice, B. J. (1996) "The Timing Factor in the Consent Process," *Journal of Transplant Coordination*, Vol.6, No.2, pp.84-87.
- Nolan, B. E. and Spanos, N. (1989) "Psychosocial Variables Associated with Willingness to Donate Organs," *Canadian Medical Association Journal*, Vol.141, No.1, pp.27-32.
- Ohnuki-Tierney, E. (1994) "Brain Death and Organ Transplantation : Cultural Bases of Medical Technology," *Current Anthropology*, Vol.35, No.3, pp.233-254.
- Parisi, N. and Katz, L. (1986) "Attitude towards Posthumous Organ Donation and Commitment to Donate," *Health Psychology*, Vol.5, No.6, pp.27-32.
- Peele, A. S. (1989). "The Nurse's Role in Promoting the Rights of Donor Families," *Nursing Clinics of North America*, Vol.24, pp.939-949.
- Pelletier, M. (1992) "The Organ Donor Family Members' Perception of Stressful Situations during the Organ Donation Experience," *Journal of Advanced Nursing*, Vol.17, pp.90-97.
- Pessemier, E. A., Bemmaor, A. C., and Hanssens, D. M. (1977) "Willingness to Supply Human Body Parts : Some Empirical Results," *Journal of Consumer Research*, No.4, pp.131-140.
- Peters, T. G., Kittur, D. S., McGaw, L. J., First, R. M., and Nelson, E. W. (1996) "Organ Donors and Nondonors : An American Dilemma," *Archives of Internal Medicine*, Vol.156, No.21, pp.2419-2424.
- Powpaka, S. (2008) "Modeling Organ Donation Behavior : A Test of the Theory of Planned Behavior Model," *Journal of Nonprofit and Public Sector Marketing*, Vol.4(3), pp.33-62.
- Prochaska, J. O. And Velicer W. F. (1997) "The Transtheoretical Model of Health Behavior Change," *American Journal of Health Promotion*. Vol.12, No.1, pp.38-48.
- Purewal, S., and Van Den Akker, O. B. A. (2010). "A Study of the Effect of Message Framing on Occyte Donation," *Human Reproduction*, Vol.24(12), pp.3136-3143.
- Radecki, C. M. and Jaccard, J. (1997) "Psychological Aspects of Organ Donation : A Critical Review and Synthesis of Individual and Next-of-kin Donation Decisions," *Health Psychology*, Vol.16, No.2, pp.183-195.
- Reid, M. and Wood, A. (2008) "An investigation into blood donation intentions among non-donors," *International Journal of Nonprofit and Voluntary Sector Marketing*, Vol.13(1), pp.31-43.
- Rikker, R. R. and White, B. W. (1995) "The Effect of Physician Education on the Rates of Donation Request and Tissue Donation," *Transplantation*, Vol.59, No.6, pp.880-8835.
- Rodrigue, J. R., Cornell, D. L., and Howard, R. J. (2006) "Organ Donation Decision : Comparison of Donor and Nondonor Families," *American Journal of Transplantation*, Vol.6, No.1, pp.190-198.
- Roels, L., Vanreenterghem, Y., Waer, Y. M., Christiaens, N. R., Gruwez, J., and Michielsens, P. (1991) "Three Years of Experience with a 'Presumed Consent' Legislation in Belgium : Its Impact on Multi-organ Donation in Comparison with Other European Countries," *Transplantation Proceedings*, Vol.23, pp.903-904.
- Roels, L., Spaight, C., Smits, J., and Cohen, B. (2008) "Donation Patterns in Four European Countries : Data from the Donor Action Database," *Transplantation*, Vol.86, pp.1738-1743.
- Rosel, J., Frutos, M. A, Blanca, M. J., and Ruiz, P. (1999) "Discriminant Variables between Organ Donors and Nondonors : A Post hoc Investigation," *Journal of Transplant Coordination*, Vol.9, No.1, pp.50-53.
- Salim, A., Brown, C., Inaba, K., Mascarenhas, A., Hadjizacharia, P., Rhee, P., Belzberg, H., and Demetriades, D. (2007) "Improving Consent Rates for Organ Donation : The Effect of an Inhouse Coordinator Program," *Journal of Trauma-Injury Infection & Critical Care*, Vol.62, No.6, pp.1411-1415.
- Sanner, M. A., Hedman, H., and Tufveson, G. (1995) "Evaluation of An Organ Donor Card Campaign in Sweden." *Clinical Transplantation*, Vol.9, pp.326-333.
- Shafer, T., Wood R. P., Van Buren, C., Guerriero, W., Davis, K., Sullivan, H., Reyes, D., Levert-Cole, T., and Oppermann, S. (1998) "An In-house Coordinator Program to Increase Organ Donation in Public Trauma Hospitals," *Journal of Transplant Coordination*, Vol.8, No.2, pp.82-87.
- Shulz, K. H., Meier, D., Clausen, C., Kuhlencordt, R., and Rogiers, X. (2000) "Predictors of Intention to Do-



- nate Organs : An Empirical Model," *Transplantation Proceedings*, Vol.32, No.1, pp.64-65.
- Siminoff, L. A., Gordon, N., Hewlett, J., and Arnold, R. M. (2001) "Factors Influencing Families' Consent for Donation of Solid Organs for Transplantation," *The Journal of the American Medical Association*, Vol.286, No.1, pp.71-77.
- Siminoff, L. A. and Lawrence, R. H. (2002) "Knowing Patients' Preferences about Organ Donation : Does it Make a Difference?" *Journal of Trauma-Injury Infection & Critical Care*, Vol.53, No.4, pp.754-760.
- Skumanich, S. A. and Kintsfather, D. P. (1996) "Promoting the organ donor card : A causal model of persuasion effects," *Social Science Medicine*, Vol.43, pp.401-408.
- Soh, P. and Lim, S. M. (1992) "Opting-Out Law : A model for Asia – the Singapore Experience," *Transplantation Proceedings*, Vol.24, pp.1337.
- Sönmez Y, Zengin E, Öngel K, Kişioğlu N, Öztürk M. (2010) "Attitude and Behavior Related to Organ Donation and Affecting Factors : A Study of Last-Term Students at a University," *Transplantation Proceedings*, Vol.42, pp.1449-1452.
- Stefanone, M., Anker, A. E., Evans, M., and Feeley, T. H. (2012) "Click to "like" Organ Donation : The Use of Online Media to Promote Organ Donor Registration," *Progress in Transplantation*, Vol.22(2), pp.168-174.
- Sun. H. J. (2014) "A Study on the Development of Public Campaign Messages for Organ Donation Promotion in Korea," *Health Promotion International*, Vol.30(4), pp.903-918.
- Studts, J. L., Ruberg, J. L., McGuffin, S. A., and Roetzer, L. M. (2010) "Decisions to Register for the National Marrow Donor Program : Rational vs Emotional Appeals," *Bone Marrow Transplantation*, Vol.45(3), pp.422-428.
- Thaler, R. H., & Sunstein, C. R. (2008). *Nudge : Improving Decisions About Health, Wealth, and Happiness*, Yale University Press.
- Thomson, N. M. (1993) "Transplantation -The Issues : A Cross Curriculum Programme for Secondary Schools," *Transplantation Proceedings*, Vol.25, pp.1687-1689.
- Tymstra, T. J., Heyink, J. W., Pruim, J., and Slooff, M. J. H. (1992) "Experience of Bereaved Relatives Who Granted or Refused Permission for Organ Donation," *Family Practice*, Vol.9, No.2, pp.141-144.
- Vanreterghem, Y., Waer, M., Roels, L., Lerut, T., Gruwez, J., and Vandeputte, M. (1988) "Shortage of Kidneys, A Solvable Problem? The Leuven Experience," *Clinical Transplant*, pp.91-97.
- Von Pohle, W. R. (1996) "Obtaining Organ Donation. Who Should Ask," *Heart and Lung*, Vol.25, No.4, pp.304-309.
- Wakeford, R. E. and Stepney, R. (1989) "Obstacles to organ donation," *British Journal of Surgery*, Vol.76, No.5, pp.35-439.
- White, K. M., Poulsen, B. E., and Hyde, M. K. (2017) "Identity and Personality Influences on Donating Money, Time, and Blood," *Nonprofit and Voluntary Sector Quarterly*, Vol.46(2), pp.372-394.
- Wheeler, M. S., O'Friel, M., and Cheung, A. H. S. (1994) "Cultural Beliefs of Asian-Americans as Barriers to Organ Donation," *Journal of Transplant Coordination*, Vol.4, pp.146-150.
- Wolf, J., Servino, R., and Nathan, H. (1997) "National Strategy to Develop Public Acceptance of Organ and Tissue Donation." *Transplant Proceedings*, vol.29, No.1-2, pp.957-963.
- Woo, K. T. (1992) "Social and Cultural Aspects of Organ Donation in Asia," *Annals of the Academy of Medicine, Singapore*, No.21, pp.421-428.
- Wu A. M. S., and Tang, C. (2009) "Solving the Dilemma : Family Communication about Organ Donation Among Chinese, Japanese, and Caucasian American College Students," *Journal of Applied Social Psychology*, Vol.39, pp.1639-1659.
- Youngner, S. J., Landefeld, C. S., Coulton, C. J., Juknialis, B. W., and Leary, M. (1989) "Brain Death and Organ Retrieval : A Crosssectional Survey of Knowledge and Concepts among Health professionals," *Journal*

- of the American Medical Association, No.261, pp.2205-2210.
- 梅原猛 (1999) 『「脳死」と臓器移植』朝日新聞社.
- 瓜生原葉子・長谷川友紀・高橋公太他 (2004) 「欧州における臓器提供の現況と推進への取り組み－日本の臓器提供数増加に向けて－」『移植』第39巻第2号, 145-162頁.
- 瓜生原葉子 (2012) 『医療組織のイノベーション－プロフェッショナルリズムが移植医療を動かす』中央経済社.
- 瓜生原葉子 (2016) 「戦略オーケストラ－臓器提供増加に資する総合戦略」『肝胆脾』第72巻3号, 405頁－417頁.
- 瓜生原葉子 (2017) 「オプトアウト制度変更までに解決すべき課題－英国ウェールズ州一般に対する定量調査より－」『移植』第52巻, 406頁.
- 小田亮・大めぐみ・丹羽雄輝・五百部裕・清成透子・武田美亜・平岩界 (2013) 「対象別利他行動尺度の作成と妥当性・信頼性の検討」『心理学研究』第84巻, 28-36頁.
- 桜井茂男 (1988) 「大学生における共感と援助行動の関係－多次元共感測定尺度を用いて」『奈良教育大学紀要』第37巻, 149-153頁.
- セイラー, リチャード・キャス・サンスティーン, 2009. 実践行動経済学－健康, 富, 幸福への聡明な選択, 遠藤真美訳, 日経BP社.
- 内閣府大臣官房政府広報室 (2017) 『移植医療に関する世論調査 (2017年8月調査)』内閣大臣官房政府広報室. <https://survey.gov-online.go.jp/h29/h29-ishoku/gairyaku.pdf> (2019年3月31日現在)
- 中村八重 (2006) 「韓国の臓器移植における儒教－儒教は臓器移植を阻害するか?－」『アジア社会文化研究』第7巻, 74-91頁.
- 波平恵美子 (1990) 『脳死・臓器移植・がん告知』福武書店.
- 箱井英寿・高木修 (1987) 「援助規範意識の性別, 年代, および, 世代間の比較」『社会心理学研究』第3巻第1号, 28-36頁.